

薄暗いダンジョンの奥、私たちは完全に道に迷っていた。

松明の炎が揺れるたびに、壁に私たちの影が不気味に踊る。

「……この先、何かある」

グランが剣を構えたまま、低い声で言った。

「罠かもしれない。俺の後ろにいろ」

「うん」

私は杖を握りしめて、グランの背中に続いた。

本来は四人パーティーだったのに、途中で仕掛けられた落とし穴で散り散りになってしまった。

今は、グランと私の二人だけ。

心細いけど——グランがいるから、大丈夫。

頼れる背中。広い肩。剣を握る、逞しい腕。

（……見惚れてる場合じゃないのに）

グランのことが好きだった。

パーティーを組んで一年。最初は頼れるリーダーとしか思っていなかったのに、いつの間にか目で追うようになっていた。

——でも、自分の気持ちは押し隠したまま。仲間としての関係を壊したくない。

それに——まだ魔王を倒せていないのに、グランが私のことを受け入れてくれるはずがない。

「……この部屋、おかしいな」

広間に出た瞬間、グランが足を止めた。

天井が高い。壁には見たことのない紋様が刻まれている。

空気が——甘い匂いにする。

「グラン、これ……」

「下がれっ！」

グランが叫んだ瞬間、足元が光った。

魔法陣だ。侵入者が踏みつけた途端に発動するタイプの――
気づいた時には遅かった。

「きゃあっ！」

何かが足首に絡みついた。

見下ろすと――魔法陣の中から無数の触手のようなものが伸びてきて、私の身体に巻きついていく。

「なっ……離してっ……！」

杖を振ろうとしたけど、手首を掴まれた。

両腕を左右に引っ張られて、身動きが取れなくなる。

「くっ……！」

グランが剣を振るう。

でも、触手は次から次へと湧いてきて、キリがない。

「グラン……っ！」

「待ってろ、今助け——」

その時、天井から紫色の霧が降ってきて、グランの身体を包み込む。

「なっ……これは……っ」

グランは咳き込んだかと思うと——動きが止まった。

「グラン……？」

呼びかけには応じなかった。剣を持った腕が、だらりと下がっている。

顔を上げた彼の目が——赤く光っていた。

「グラン……？ 大丈夫……？」

返事がない。ただ、獣のような息遣いだけが聞こえる。

「——っ」

本能的に、危険を感じた。

でも、逃げられない。触手に捕まったまま。

「グランっ！しっかりして……っ！」

その声はグランには届かなかった。

彼の目には、もう理性の光がなかった。

そうこうしているうちに、触手が動き出す。状況は最悪だった。

「やっ……離して……っ」

足首を掴んでいた触手が、ゆっくりと這い上がってくる。ふくらはぎ、膝の裏、太もも。ヌルヌルした感触が、肌の上を滑っていく。

「ひっ……気持ち悪い……っ」

別の触手が、腰に巻きついた。ローブの裾から中に入り込んでくる。

「やだっ……な、なに……っ！？」

もちろん触手に言葉なんて通じない。するすると布の下を這って、お腹のあたりに触れた。

ヌル……♡

「ひゃっ……！」

冷たい。ヌメヌメしていて、生々しい感触。それが肌の上を這い回る。

「や、やめ……てっ……」

別の触手が、今度は胸元から滑り込んできた。ローブは胸元が開いているデザインで、簡単に侵入を許してしまう。

「あっ……やだ……そこ……っ」

下着の上から、ぬちゅっと胸を掴まれた。

「んうっ♡」

触手が蠢いて、どういわけか胸を揉み始めた。

ムニユ……ムニユムニユ……♡

「やっ……なに、触らないで……っ♡」

気持ち悪い。こんなの、気持ち悪いはずなのに——触手の表面から、何か液体が染み出していた。それが、肌に染み込んでいくごとに、じわ

りと、身体の奥が熱くなる。

「あ……っ？なに……これ……♡」

——媚薬。

そういう呪術があることは知っていた。魔物が獲物を弱らせるために使う、卑劣な術。まさか、自分がかけられる日がくるなんて。

「やだ……っ♡身体が……熱い……っ♡」

抵抗しようとするのに、力が入らない。触手が触れるところが、全部敏感になっていく。

グニっ♡　グニグニっ♡

「んあっ……♡」

いやらしく揉み込まれて、思わず甘い声が漏れた。

（違う……こんなの……気持ちよく、ない……っ♡）

脳内で必死に否定する。でも、身体は正直だった。触手が胸を揉むた

びに、お腹の奥がきゅつと疼く。

「やつ……やだあ……っ♡」

触手が、下着の中に潜り込んできた。直接、胸に触れる。

ヌチャ……♡

「ひあっ♡」

乳首に、触手の先端がツンと触れた。それだけで、背筋がぞくりとした。

「そこ……だめえ……っ♡」

触手は容赦なく、乳首を弄り始めた。

キュっ♡ クリクリ♡♡

「あっ♡んっ♡やだ……っ♡♡」

摘まれて、転がされて、引っ張られて。ビリビリと電流が走るような感覚。

「ひあっ♡そこお……♡♡」

両方の胸を、同時に弄られていた。左右の乳首を、それぞれ別の触手が責めている。

グニグニ♡ キュッ♡ スリスリッ♡♡

「あっ♡あっ♡♡乳首スリスリしないでよお♡♡」

頭がぼうつとしてくる。抵抗しなきゃいけないのに、力が入らない。

（グランが……見てる……っ）

ちらりと視線を向けると、グランが立っていた。赤い目で、じっと私を見ている。動かない。ただ、じっと無表情に眺めている。グランも何かの呪いに侵されているのだろう。

（好きな人に……こんな姿……見られるなんて……っ）

恥ずかしい。恥ずかしいのに、身体は与えられる刺激に敏感に反応し続けている。

「やあ……っ♡♡見ないでえ……っ♡♡」

触手が、私のローブを引っ張った。

ビリッ。

「ひっ……!」

布が裂ける音。胸元が、大きく開かれた。

ビリビリビリッ。

「やだっ……やめてっ……!」

止まらない。ローブがどんどん破かれていく。肩から、お腹から、スカート部分まで。

ビリビリビリビリッ。

「あ……っ」

気づいたら、上下真っ白の下着姿になっていた。

それを——好きな人に、見られている。

「やだ……こんなの……やだあ……！」

涙が滲んできた。でも、触手は止まらない。今度は、下着にも手をかけ始めた。

パチンっ。

「ひっ！」

ブラジャーのホックが、外された。するりと布が落ちて、たわわな胸元が露わになる。

「やっ……見ないで……っ」

両手を拘束されているから、隠せない。グランの赤い目が、私の胸を見ている。

「やだ……グラン、見ないで……っ」

触手が、露わになった胸に這い上がってきた。直接、乳首に触れる。

ヌチャ♡

「ひあっ♡♡」

下着越しとは比べ物にならない刺激。触手のヌルヌルした感触が、敏感な乳首を包み込む。

「あっ♡やっ♡直接は……だめ……っ♡♡」

グニグニ♡♡ グリグリ♡♡ キュキュキュ♡♡

「んあっ♡♡そんな、や、乳首キュッて摘まないでえ♡♡」

両方の乳首を同時に弄られて、腰が浮きそうになる。ズンズンと、身体の内奥が疼いている。

（やだ……気持ちいい……っ♡♡）

否定しきれなくなっていた。触手に胸を弄られるのが、気持ちいい。媚薬のせいだ。媚薬のせいだから――

「あっ♡♡んっ♡♡やあ……っ♡♡」

触手の一本が、乳首に吸盤のように吸い付いた。

チュウウ♡♡

「ひゃあっ!?!♡♡」

強く吸われて、背中が反り返った。

「やだっ♡♡ そんな……チュパチュパ吸わないでよお!!!♡♡」
チュウウ♡♡ チュパチュパ♡♡

「んあっ♡♡ あっ♡♡ おかしく……なっちゃう……っ♡♡」

乳首を強く吸われるたびに、下腹部が、きゅうきゅうと締め付けられるような感覚。

「あっ♡♡ あっ♡♡ 何か……変……っ♡♡」

——その時、別の触手が動いた。

お腹を這い降りて、ショーツの中に入り込んでくる。

「ひっ……! そこは……っ!」

一番触られたくない場所に、触手が近づいていく。太ももの内側を這

って、中心へ。

「や、やだっ……そこだけは……っ」

クチュ♡

「ひあっ♡♡」

触手が、秘部に触れた。下着越しじゃなくて、直接――

「あっ♡やだ……そこはダメ……触らないで……っ♡♡」

ヌルヌルの触手が、確かめるように割れ目をなぞる。

ヌル♡ クチュ♡♡

「んあっ♡♡ひあっ♡♡」

気持ちいい。こんな感情を持たない生物に気持ちよくさせられている
自分が信じられなかった。

「やだ……っ♡♡こんなの……っ♡♡」

触手が、動きを速めた。

グチュグチュ♡♡ グチュグチュ♡♡

「あっ♡♡ あっ♡♡ そこおっ♡♡」

グリっ♡♡

「ひゃあっ♡♡」

クリトリスに、触手の先端が触れると、電流が走ったみたいな刺激に身体がビクンとなる。

「ひいっ♡♡ そこ……だめ……♡♡」

グリグリ♡♡ クチュクチュ♡♡

「んあっ♡♡ あっ♡♡ やあ……っ♡♡」

そこが弱点だと気づいたかのように、容赦なくクリトリスを弄られる。まるで意思を持っているかのように、上下に、左右に、円を描くように。

グリグリグリーイイイツツ♡♡

「ひううっ♡♡ だめえ……そこばっかりやらあ♡♡」

与えられる快樂に頭がとろけそうだった。胸をじゅるじゅると吸われながら、下も弄られて、何も考えられなくなってくる。

(グランが……見てる……のに……っ♡♡)

好きな人の前で、触手に感じさせられている。最悪だ。最悪なのに——
——気持ちいいのが止まらない。

「あっ♡♡あっ♡♡んあぁあ♡♡」

グチュグチュグチュグチュグチュグチュッ♡♡

「何か……い……ん♡♡んおおっ♡♡きちやう♡♡」

お腹の奥が、きゅうつと締め付けられる感覚。知らない波が、押し寄せてくる。

「やらあっ♡♡らめらめえ♡♡んおおっ♡♡」

グリグリグリっ♡♡

ヂュウウウウ♡♡

「不っ♡♡♡んおおおーっ♡♡♡」

ビクンっ♡♡

全身が震えた。頭が真っ白になって、何も考えられなくなる。

「あ……っ♡♡♡んうう……っ♡♡」

初めての感覚だった。こんなに強い刺激は初めてだった。

（……私、触手に……イカされちゃった……）

「は……っ♡♡はあ……っ♡」

まだ、絶頂の名残に身体がびくびくと痙攣している。

（いやだ……こんなの……いやよ……）

でも、触手は止まらなかった。いったばかりの身体を、また弄り始める。

「やっ……待って……っ♡♡♡今いったばかりなのお……っ♡♡」

グチュ♡♡クチュクチュ♡♡ヂュヂュウウ♡♡

「ひあっ♡♡ 敏感になってるからあっ♡♡ やだああ♡♡」

いったばかりの身体はさつきより敏感に感じる。触られるだけで、腰が勝手にへこへこ動いてしまう。

「んあああっ♡♡ だめ……また……っ♡♡」

グリグリグリっ♡♡♡

「んおっ♡♡♡ イグイグイグーっ♡♡♡」

ビクビクっ♡♡♡

また、イカされた。媚薬の力があるとはいえ、こんなに一瞬で。

「らめらめええーっ♡♡♡」

まだ終わらない。触手は何度でも、私をイかせようとしてくる。

グチュグチュ♡♡♡ グリグリ♡♡♡

「ひあっ♡♡♡ んおおおっ♡♡♡ ツツ♡♡♡ ま、またあ……♡♡♡♡♡」

ビクンビクンツツ♡♡♡♡♡

あつという間に三回目の絶頂が訪れる。もう、抵抗する気力はどこにもなかった。

「は……っ♡♡はぁ……っ♡♡もう……やだ……っ♡♡」

身体がとろとろに蕩けていく。触手の媚薬が、どんどん染み込んでいく。頭がぼんやりして、何も考えられない。

(助けて……グラン……っ)

赤い目のグランを見た。助けてほしかった。

でも——グランは、動かなかった。ただ、じっと、感情のこもらない虚な瞳で私を見ていた。けれど——

「グラン……っ♡♡」

——私が名前を呼んだその時だった。呪いの効果が切れたのか、ようやくグランが動いた。

ドサっ、と音がして、一瞬にして触手が千切れ飛んだ。